

近世における『袋法師絵巻』の受容

吉橋 さやか

はじめに

『袋法師絵巻』は、一四世紀ごろの制作と考えられる絵巻で、『小柴垣草紙』や『稚児之草子』と並んで、中世の三大性愛絵巻の一つに挙げられる作品であり、別名に『太秦物語』や『袋草子』などがある。物語の内容は、道に迷って川辺で立ち往生していた三人連れの女たちが、舟に乗ったある法師と出会い、川を無事に渡してもらったかわりに法師と情交を結ぶというところから始まる。その日の情交をきっかけとして、後日その法師は女たちの住まいである太秦の屋敷を訪れ、再度女たちと情交を結ぶ。さらに法師は、女所帯で男日照りの日々を送っていたその屋敷の女主人である尼たちにも気に入られ、彼女たちの性の慰みものとして大きな袋の中にかこわれ、精根尽き果てるまで情交の限りを尽くす。物語の展開と絵画表現の双方により、滑稽色が際立った性話となっている。

本作品は近世の春画・艶本研究において以前から度々紹介され、

近世の一連の性愛作品の前史として認知されてきた。しかしながら、露骨な性描写が全面に押し出された作品であるせいかな、本作品は一部の好事家に受け止められていたにすぎず、本格的な研究は長い間為されてこなかった^①。近年、中世文学研究の立場から、拙稿で中世の身体観や笑いの一端を表す作品としてこれを取り上げ、本作品の現存伝本の調査・検討を行って諸本のありようを示す^②とともに、作品のモチーフである《袋》の意味などについて考察した^③。ここに本作品の研究基盤が築かれたが、まだまだ取り組むべき課題は多い。

本稿では、近世における本絵巻の作者考を確認するとともに、現存伝本の調査によって見えてきた近世の所蔵者や模写者について述べ、本作品の近世における享受の様相を明らかにしたい。

一、近世の作者考

◆『倭錦』

『袋法師絵巻』の作者には諸説あるが、これまでのところ、絵

師は飛驒守惟久であるとする説が多い^④。飛驒守惟久（巨勢惟久）は鎌倉時代・一四世紀の大和絵師で、『後三年合戦絵巻』を描いたことでも知られる人物である。この惟久を『袋法師絵巻』の絵師とする確証はないが、惟久を絵師と見る近世の記述には、たとえば、江戸中期の幕府の御用絵師であつた住吉広行（一七五五—一八一—）編纂の『倭錦』が挙げられる。これは大和絵師ごとに、その絵師が手がけたと思われる絵巻や古画を分類したものであるが、この中で本絵巻と思われる記述が二箇所を確認できる。一つは「飛驒守惟久」の項に、「後三年軍記」などと並んで挙げられている「袋草子」である。「袋草子」は平安末期の歌学書をさす場合がほとんどだが、実は『袋法師絵巻』の別名でもあるので、これが本絵巻のことである可能性は否定できない。二つ目としては、室町時代初期の土佐派の絵師である「土佐行廣」の項に「奈世竹物語」などと並んで挙げられた「太秦什物」である。『袋法師絵巻』には、「うずまさ」や「太秦物語」などといった別名もある^⑤ので、これもまた本絵巻のことである可能性がある。『倭錦』における『袋法師絵巻』が、これら「袋草子」と「太秦什物」のうちのどちらであるのかは判断しがたいが、住吉広行が、本絵巻の絵師を飛驒守惟久か土佐行廣のいずれかと考えていたことがわかる^⑥。

この他、本絵巻の詞書を収めた写本に、国学者による考証が示されているものがある。たとえば次に示す宮内庁書陵部本や実践女子大本などでは、写した者が本絵巻をどう捉えていたのかわかる。

◆宮内庁書陵部蔵『片玉集』六十五所収本

『片玉集』は、江戸中期の国学者・歌人である津村涼庵（一七三六—一八〇六）が、平安時代から江戸中期までの九八十点にも及ぶ文学を記した叢書（三編二四九冊から成る）だが、ここに本絵巻の詞書が収められている。詞書末尾には、この絵巻が「あるふる御所の櫃の底に」埋もれていたとある。また「ふるき土佐の書たるものにて、詞書もまたその世の筆とおぼゆ」とあり、涼庵が土佐派の古い絵師を本絵巻の絵師と見ていたことがわかる。

◆実践女子大本

実践女子大本は、表紙に「春村纂」の朱書きがあり、江戸末期の国学者・歌人であつた黒川春村（一七九—一八六七）による写本である。奥書から、書写年は天保十一年（一八四〇年）。春村の弟子であり養子となつた真頼や、真道の蔵書印も見られ、代々黒川家で引き継がれていたことがわかる。巻末には、「之は吉永僧正の筆すさび」によって伝えられたとある。吉永僧正とは『愚管抄』を記した平安末期から鎌倉初期の天台の僧・慈円の通称である。歌人としても有名で『拾玉集』や『千載和歌集』などに和歌が見受けられ、『沙石集』や『井蛙抄』には慈円の和歌にまつわる逸話も散見できる。この人物が『袋法師絵巻』を「筆すさびに」書いたとする春村の根拠は不明だが、慈円が詞書筆者である^⑦とすると、『袋法師絵巻』の詞書の成立年代を一二世紀末—十三世紀初期ごろにまで遡ることとなり、慎重に検討する必要がある。このように、近世における本絵巻の作者考を簡単に確認したが、いずれにしても作者についての確証はない。画風などを見る限りでは、『後三年合戦絵巻』などとの類似性も認められ、成立はやはり一四世紀と見ることができると思われるが、絵師を惟久とす

る説については、一四世紀頃の作品とおぼしき絵巻というだけで惟久作と考えられていた傾向があったため、必ずしもそれが事実であるとは限らないことを念頭に置いておく必要がある。現段階では、福田和彦氏がすでに指摘しているように、土佐派の画系の祖とされる絵師によって描かれたものとする見解にとどまるほかないだろう。

二、近世の所蔵者・模写者像

『袋法師絵巻』の現存伝本は近世の模写本が主で、版本は見あたらない。詞書のみを写したものもあるし、絵巻の形態で絵と詞書の双方が写されているものもある。諸本のリストや内容上の異同については、すでに拙稿でまとめたので、そちらを参照されたい。¹⁰ここでは、各諸本を調査するなかで得られた巻末・奥書情報などをもとに、本絵巻の近世の模本群が、どのような人物によって模写され、所蔵されていたのか、その受容の様相を明らかにしたい。すでに挙げた資料からは、住吉広行や津村涼庵、黒川春村などが本絵巻を認知していたことを確認したが、彼ら以外にも実に多くの受容者がいたのである。ではいったい、どのような人物が本絵巻を観ていたのか、本絵巻の模本やその他の文献の記述から確認する。

◆ミカエル・フォーニツ・コレクション本（横山家旧蔵光悦本）

早川聞多氏によると、この伝本は江戸時代初期の模写本で、「本阿弥光悦（一五五八—一六三七）が加賀藩主前田利常に献上し、さらに前田家筆頭家老の横山康玄に譲渡されて横山家に伝わった

もの」とある。¹¹サントリー美術館にも本絵巻の模本があるが（以下サントリー本¹²、こちらも本阿弥光悦によるものと目されている、管見の限り、サントリー本と本伝本とは絵が異なっていると思われるため、光悦が複数本の模本制作に携わったと考えるべきであろうか。加賀藩主であった前田利常（一五九三—一六五八）は、徳川秀忠の娘である珠姫を妻として将軍家と深い関係を持ち、娘を時の有力者へ嫁入りさせ、前田家の基盤を固めた人物である。幕府から警戒されることを避けようとした利常が、鼻毛を長く伸ばして愚君を装ったという逸話があるほか、奇行やかぶき者気質を示す逸話が多い¹³。そしてその家老の横山康玄（一五九〇—一六四五）は、利常が幕府からかけられた謀叛の嫌疑を晴らし、計九千石の禄高をもった人物である。

◆大分県立図書館蔵『硯田叢史 鎌倉右大臣家集外五種』所収「袋法師絵考」の記述

『硯田叢史』は、天領乙津村（現大分市）の富豪であった後藤真守（一八〇五—一八八二。号『硯田』）による、文学・地史・歴史に関する収集・抄出を書写したものが、その中に「袋法師絵考」という、伊勢貞丈（一七一七—一七八四）による本絵巻考が収められている。伊勢貞丈は江戸の有職家・国学者で、幕臣であった伊勢貞益を父に持つ。伊勢家は室町幕府の政所執事の家柄として知られ、殿中の礼法故実を伊勢流と称して伝えたが、貞丈も有職故実に通じ、特に武家の故事に傾倒した研究を遺したほか、神道にも造詣が深かった¹⁴。貞丈は、本絵巻の内容が、『今昔物語集』の間男の話と似ている点があることを指摘している¹⁵。伊勢の神宮文庫には、文化十年（一八一三年）の奥書を持つ「袋法師拔画」

なる写本があるが（書写者未詳）、これは本絵巻の絵の抄出本である。いくつかの場面の絵が「抜画」として描かれているのだが、そのうしろには『硯田叢史』所収の貞丈の「袋法師絵考」と同内容の文章が書かれており、本絵巻の受容・享受の文化圏や伝播を考える上で興味深い。

◆滝沢馬琴『羈旅漫録』の記述

馬琴の『羈旅漫録』「第六十六 太秦の草紙」の項には、

太秦の草紙、室町家の時の戯作春画なり。原本は今出川相国寺にありといふ。この写し一卷、橋本経亮方より求めよとておこしたりけるが、文面首尾せざりければ返す

とある。「太秦の草紙」とは本作品の別名であるが、ここでは、原本が相国寺にあるとする伝聞が確認できる。相国寺は一三二一年に足利義満が創建し、現在の京都の今出川烏丸にある臨済宗相国寺派の大本山であり、京都五山の一つであるが、応仁の乱以後、度々火災にあい、現在の本堂は一六〇五年に豊臣秀頼によって再建されたものである。原本が相国寺にあったかどうかは不明だが、いずれにしても何らかの形で逸したと思われる。そして馬琴の記述には、内容不首尾の模写本をめぐる橋本経亮（一七五五—一八〇五か）とのやりとりが書かれているが、この橋本経亮は肥後守で、京都の梅宮大社の正禰宜や宮中の非蔵人も務めた国学者・有職故実家である。『橘窓自語』や『梅窓筆記』などの著書があり、高橋図南から有職故実を、上田秋成から和歌を学ぶほか、本居宣長らとの交友も知られるが、宣長は横井千秋へ経亮を紹介する際、「右橋本ハ俗人ナラズ、古学篤志ノ人ニ而、甚厚情ノ仁ニ御座候」などと経亮のことを評している。古絵図を考証の拠り所とするこ

とも多く、絵画への造詣も深かったようである。画家の谷文晁（一七六三—一八四〇）や有職故実家の栗原信充（一七九四—一八七〇）が経亮の肖像を描いており、彼らとの接点も確認できよう。この経亮が本絵巻の内容不首尾の模写本一卷を観ていた或いは所蔵していたことが、馬琴の記述から確認できるのである。

◆毛利梅園『本朝画図品目』の記述

江戸後期の博物家である毛利梅園（一七九八—一八五二）の『本朝画図品目』（一八三四年）では、「袋法師画者詞書筆者不詳」とあるものの、「別本袋法師太秦一卷」の項では「准后之御本令摹写畢不可出私箱者也 文明十三年二月 為親花押」とある。文明期の「為親」は、五条為学之父である五条為親と考えられるが、文明十三年は為親が倒れた年である。また文明期に准后宣下を受けた人物は、大炊御門信子のほか複数の僧がおり特定できないが、准后が本作品の別本を所蔵していたことがわかる記述として注目される。

◆静嘉堂文庫本（岩崎家本）

文化三年（一八〇六年）の奥書を持つ。書写者は「本多忠のり」とあるが、これは江戸時代後期の有職故実家であった、本多忠憲（一七七四—一八二三）のことであると考えられる。忠憲は故実を伊勢貞春から、俳諧を父の忠永から、和歌を柴山徳豊から学び、伴直方、屋代弘賢、小山田与清らと交友関係にあった人物である。著書では特に軍陣故実の著作が多い。静嘉堂文庫本の忠憲による卷末記述の中に、「絵および詞書は画工住吉の家にてふかく秘め事にせるごとし。古屋光敦みづから抜き写しになつて予に見せ侍りけるを、其まま写し留めてみる」とある。古屋光敦については

未詳であるが、住吉派によつて本絵巻が秘藏されていたことがうかがえる。

◆多賀神社本

愛媛県宇和島市が多賀神社本には、二つの奥書があり、元奥書は文化十三年（一八一六年）である。「於絵所預家土佐氏模写法橋豊泉 原本撮局者西播姫城臣豊田氏珍藏」とあり、絵所預の土佐派の絵師が模写した伝本を、法橋豊泉が写したというのである。法橋豊泉は高井豊泉のことで、京都大学図書館所蔵の『年中行事絵巻』（朝観行幸）の奥書にもその名が確認できるほか、東京国立博物館所蔵『奈与竹物語絵巻』の元奥書（寛政十二年・一八〇〇年）にも「法橋豊泉源孝之」とあるように、法泉が絵巻の模写を度々行っていた人物であることがわかる。

この豊泉による模本を写した多賀神社本の奥書は、文政四年（一八二一年）のもので、「高木豊前令模シテ詞ハ野宮侍従定祥朝臣書可為称宝者也」とある。高木豊前は、越前北ノ庄初代藩主で越前松平家宗家初代である、結城秀康の家臣であつた。結城秀康は徳川家康の次男で豊臣秀吉の養子となつた人物であるが、秀康の年譜²³には、秀康が豊前に江戸の山の手の広大な土地を与えようとしたが、広大すぎるといつて豊前は半分だけ受け取つたという逸話が見える。詞書筆者の「野宮侍従定祥朝臣」は、藤原北家師実流花山院家の庶流である野宮家の第十一代当主の野宮定祥（一八〇〇—一八五八）と考えられるが、彼は権大納言になつた江戸後期の公卿である。

そしてこの多賀神社本には「宇和島藩伊達十萬石六代藩主（文政四年）伊達村寿侯花押付袋法師絵巻」という極め書きがある。

宇和島藩における伊達家の時代は、伊達秀宗が徳川秀忠から宇和島藩十萬石を与えられたことを契機として一六一五年から始まつたが、その第六代藩主の伊達村寿（一七六三—一八三六）の時代は、藩の財政難が厳しく、村寿は藩経済の立て直しに奮闘する傍ら、文化・教育にも力を注いだ。

◆東京国立博物館本

東京国立博物館本（以下東博本）の奥書では、

右袋法師の図は土佐光信がえがく所にして大城絵所にありしを、天保年中西城の火にあひてうせぬ。その後嘉永四とせの春、ある人のもとよりふるき模本をえて画並詞ともうつし置

ところなりけり。あなかしこ雅信²⁴

とあるように、嘉永四年（一八五一年）に、徳川家茂・家慶に仕えた奥絵師である木挽町狩野家の勝川院雅信（一八二三—一八八〇）が、本絵巻の古い模本を借り受けて写したとある。そして雅信によると、原本が模本かは定かではないが、室町中期から戦国時代にかけて活躍した大和絵師である土佐光信が描いたとする『袋法師絵巻』が、天保年間まで江戸城の絵所にあつたが、火事によつて焼失したという。この記述から、徳川將軍家が「大城絵所」で『袋法師絵巻』を所蔵していたことがうかがえ、本絵巻の享受の一端を示す資料として注視される。

◆国立国会図書館本

国立国会図書館本（真島校園編『校園叢書』二十二所収本。以下国会本）には二つの奥書があるが、元奥書には、

袋法師之絵一卷借受大膳大夫哲長朝臣秘藏之本書写之昇
政三^兵 辰歳四月七日終功 主水正清原宣嘉（花押）

とある。「大膳大夫哲長朝臣」とは、藤原北家の勸修寺流の堤家の第十三代当主で、一八五三年に大膳大夫の職に就いた堤哲長（一八二七—一八六九）のことであると考えられる。藤東海作・浦川公左画『役行者御伝記図会』²⁶の序文の文末に、「堤中大夫藤原哲長朝臣 訓堂散人」とあり、哲長が序文を書いたことが確認できる。また、王普爾著・竹内貢訳述『泰西王氏統譜』²⁷の付録の序文にも、「從四位上大膳大夫藤原哲長」と哲長の名が確認でき、哲長がこうした分野に深く関心を寄せ、精通していたことがうかがえる。この哲長が『袋法師絵巻』を秘蔵し、それを清原宣嘉が借り受けたという。

清原宣嘉（一八三六—一八七三。通称・主水正）は、幕末から明治期にかけての政治家で、一八五八年の日米修好通商条約締結の際、勅許に反対し、廷臣八十八卿列参事件にかかわった人物である。それ以後、朝廷内で尊皇攘夷派として活動し、一八六三年には会津藩と薩摩藩による八月十八日の政変によって朝廷から追放された。そうした政治的活動の一方で、彼もまた藤原氏北家の流れを汲む清原家の学者でもあった。宣嘉は、『論語魏何晏集解』（斯道文庫蔵）を所蔵し、静嘉堂文庫所蔵の古活字版『孟子』³⁰には、宣嘉の書き入れがある。また宣嘉は、自ら和歌も詠んだと見られ、もと岸和田藩重臣佐々木家の末子である佐々木勇（一九〇五—一九八五）³¹の短冊コレクションの中に、宣嘉の和歌がある。

そして二つ目の奥書によると、この清原宣嘉が哲長から借りて写した安政三年（一八五六年）奥書本が、藤原実梁に貸し出され、実梁がこれを写し「珍藏」していたとある。この際には宣嘉が描いて実梁に贈ったという内容の記述があるが、国会本に絵はなく、

絵について説明した文章などもない。国会本が詞書のみを記した伝本であるため、清原宣長から藤原実梁へと描き伝えられた絵の内容については確認できない。

藤原実梁は、藤原北家閑院流、西園寺流の流れを継ぐ橋本実梁（一八三四—一八八五）であると考えられる。実の父は小倉輔季だが、後に橋本実麗の養子となった。養父の実麗は明治維新期に国事に尽力し、その妹である経子は仁孝天皇に仕え、一四代將軍徳川家茂に嫁いだ和宮親子内親王の生母であった。実梁自身は、從四位下の位で左近衛中将の職であったが、戊辰戦争の時に東海道鎮撫総督として功を立て、武部寮に在籍し、晩年には伯爵の位を授けられた。また実梁は、雅楽課長を務めた際、雅楽衰退を危惧して岩倉具視に働きかけ、楽道保存賜金の支給の実現に一躍買った人物であることも指摘されており、さらに、現在国立国会図書館が所蔵する西園寺公望関係文書の旧蔵者でもあった。

◆蓬左文庫（尾崎コレクション）本

序文と詞書は井上淑蔭、跋文は藤原千浪。井上淑蔭（一八〇四—一八八六）は江戸後期から明治期の国学者。明治二年（一九六九年）には大学中助教、明経・文章両局兼開校御用となるが、辞任後は郷里の武蔵入間郡（現埼玉県）に帰り教導職権中教正をつとめた。俳諧や和歌を好んで小松庵鈴木氏や清水浜臣、井上文雄らに師事した。二十四歳で「隱郷談」などを著し、清河八郎門に入って尊皇攘夷論者となる。西川練造や桜田輔らとともに活動する。「三くさ道乃記」では藤原千浪や伊能穎則とともに三種の道記を記している。³³

跋文を書いた藤原千浪も井上文雄に師事し、『古今和歌六帖標

注』の跋文や、『和漢書画古今名家真跡集』の序文、鈴木重嶺（翠園）関連資料の「雅言解序」の跋文（明治七年）、女子用の往来物『近世女大学』³⁵の序文などにその名が確認できる。

以上が、さまざまな『袋法師絵巻』の模本や、その他近世の文献から確認できる、本絵巻の所蔵者・模写者である。

まとめ

以上、本稿では、『袋法師絵巻』の近世の受容者像について明らかにすべく、現存伝本の記述や近世の随筆などを確認した。藤原北家の流れを汲む公家の諸氏によって本作品が所蔵・模写されていたことが明らかとなったほか、徳川家に娘を嫁がせた加賀藩主の前田利常とその家老・横山康玄らが所持していたという光悦本や、一四代將軍家茂に仕えた絵師の狩野勝川院雅信が本絵巻を借り受けて写したという東博本の記述、徳川家茂に子を嫁がせた橋本家に養子入里した実梁が本絵巻を借り、その詞書が国会本に遺っていることなどから、徳川將軍家周辺に身を置いていた人々によって、本絵巻の貸し借りや模写行為が行われていたことも明らかとなった。狩野勝川院雅信の門人には、狩野芳崖や橋本雅邦という近代日本画の祖と謳われる画家たちがいるが、彼らが師である雅信を通じて本絵巻を見ていた可能性も考えられよう。さらに地方の有力大名や彼らのお抱え絵師のほか、近世の名だたる国学者、有職故実家、歌人といった人々によって所蔵・模写されていたこともうかがえ、本絵巻が当時の教養人や文化的要人たちに

広く知られ、鑑賞されていたことがわかる。本稿で確認できた人物だけでなく、彼らと交友のあったさまざまな周辺人物にもこの『袋法師絵巻』が認知されていたことが推測され、本作品が近世に数多く作られた艶本や好色譚の下地の一つとなった可能性も考えられるだろう。今後より具体的な検討を進めていく必要がある。

注

- (1) 福田和彦『艶色説話絵巻』（浮世絵グラフィック六 KK ベストセラーズ 一九九二年）や、林美一&リチャード・レイン共同監修『秘画絵巻【小柴垣草子】』（定本・浮世絵春画名品集成一七 河出書房新社 一九九七年）、徳田和夫『袋法師絵詞』（徳田和夫編『お伽草子事典』東京堂出版 二〇〇二年）、早川聞多『袋法師絵詞』（白倉敬彦編『別冊太陽 肉筆春画』平凡社 二〇〇九年六月）などで、本絵巻のいくつかの伝本の紹介や解説がなされている。

- (2) 拙稿「東京国立博物館所蔵『袋法師絵巻』について」（『立教大学大学院日本文学論叢』第十一号 二〇一一年八月）、『袋法師絵巻』の諸本展開（『立教大学日本文学』第一〇七号 二〇一一年一月）。

- (3) 拙稿「『袋法師絵巻』の袋の用法と多義性」（『立教大学日本文学』第一〇八号 二〇一二年七月）

- (4) 林美一・リチャード・レイン氏は、注1掲載論文の中で、惟久を本絵巻の絵師と見ている。また徳田和夫氏も、注1掲載論の中で、「一説には」と惟久説を挙げているが、確証はないとしている。

(5) 秋山光和『原色日本の美術 第八巻 絵巻物』(小学館

一九六八年)による。

(6) 京都女子大本の内題では「うつまさ 袋法師絵詞」と記されている。

(7) さらに時代が下ると、幕末から明治にかけての蒐集家で古美術鑑定家であった柏木貨一郎(一八四一—一八九八。号「探古」)印行の『大倭画名巻競』(一八八四年)がある。これは『倭錦』を改訂し、相撲番付の形式で当時知られていた絵巻を整理したもので、東の大関には『信貴山縁起』、西の大関には『伴大納言絵巻』、東の関脇に『高山寺縁起』、西の関脇には『華嚴縁起』などが挙げられている。そして前頭の三四枚目に、『袋法師絵詞』が挙げられている。

(8) たとえば室町時代初期の作と考えられている『芦引絵』なども、飛騨守惟久作とされていたが、現在ではこれは否定されている。

(9) 注1掲載論文に同じ。

(10) 注2掲載論文に同じ。

(11) 『肉筆春画』(別冊太陽 平凡社 二〇〇九年)の解説より。絵巻の写真も掲載されている。また、福田和彦『浮世絵グラフィック六 艶色説話絵巻』(KKベストセラーズ 一九九二年)に掲載されているものの解説でも、「加賀藩主前田利常(一五九三—一六五八、三代藩主)が本阿弥光悦(一五五八—一六三八)から献上された臨写本で、それを家老職にあった横山康玄(一五九〇—一六四六)に譲ったもの」とされている。往時、光悦は前田家の刀剣目利き(鑑定)、書画

鑑定、茶道指南、陶芸指南役と仕え、家禄を給せられていた。加賀へは度々往来し、加賀藩の美術工芸の振興に大いに貢献した」とあり、これがミカエル・フォーンニツ・コレクション本と同じ伝本であると思われる。『第一巻 本阿弥光悦筆 袋法師絵詞』(出版社・刊年不詳)の福田氏による解説の中には、「書(詞書)は寛永の三筆と称された角倉素庵(一五七一—一六三二)であろうと推定されている。往時、嵯峨野の光悦の工房で生れた画巻である」とある。なお、最近では、英国・ロンドンの大英博物館で春画展が開催され(二〇一三年十月三日—二〇一四年一月五日)、そこでミカエル・フォーンニツ・コレクション本が展示された。

(12) サントリー美術館本については一部確認できたのみで、絵巻全篇の内容は未見である。『絵巻小宇宙—絵の中に生きる人々—』(サントリー美術館 二〇〇〇年)に一部図版が掲載されているが、この解説によると、「詞書の書風も古様を伝え、模写年代も江戸時代初期を下らない善本」とある。

(13) 徳田和夫編『お伽草子事典』(東京堂出版 二〇〇二年)の徳田氏の解説に、「サントリー美術館蔵。光悦本」とある。(14) 井原西鶴『日本永代蔵』など。若林喜三郎『前田綱紀』(吉川弘文館人物叢書 新装版 一九八六年)、見瀬和雄『利家・利長・利常』(北國新聞社 二〇〇二年)参照。

(15) 『貞丈雑記』ほか著書多数。

(16) 『今昔物語集』巻二八・二二「或殿上人忍名僧通事」。

(17) 引用本文は、『日本随筆大成』第一期第一巻(吉川弘文館 一九七五年)に拠った。

(18) 寛政三年正月一五日付、横井千秋宛書簡（本居宣長記念館より）。

(19) 羽倉敬尚「故実家橋本経亮」（『國學院雜誌』六三卷一二号一九六二年十二月）参照。

(20) 谷文晁のものは東京国立博物館所蔵。栗原信充のものは国立国会図書館蔵で、文政二年（一八一九年）のもの。

(21) 早稲田大学図書館蔵本の記述より。

(22) 小松茂美編『日本の絵巻 一七 奈与竹物語絵巻 直幹申文絵詞』（中央公論社 一九八八年）の解説や、横山恵理氏『「なよ竹物語」絵巻の諸本について』（奈良女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究科年報』第二七号 二〇一二年三月）を参照。これらによると、東博本は文化九年（一二二二年）の狩野養信（晴川院）による奥書を持っており、豊泉による模本を養信が写したもののようである。

(23) 『徳川諸家系譜』四（統群書類従完成会 一九九二年）所収「浄光公年譜」より。

(24) 村寿は、藩校内徳館を敷教館と改称（のちの明倫館）し、その整備と充実を図るなどした。村寿については、兵藤賢一『伊達村寿公伝』（創泉堂出版 二〇〇四年）に詳しい。

(25) 東京国立博物館本の奥書本文の句読点は、読みやすいように私に補った。

(26) 山形県酒田市立光丘文庫所蔵。刊本六冊。瑞雲堂・文栄堂の共同刊行。外題『役行者御利生図会』。嘉永三年（一八五〇年）跋で、跋文は保田硯苗による。

(27) 今回確認したのは酒田市立光丘文庫本の記述のみだが、そ

れ以外では、米国議会図書館蔵日本古典席目録に、藤東海作・浦川公左画『役行者御伝記図会』（袋綴六冊。刊記…大阪／一本堂・蘭蕙堂）の項があり、「序…訓堂散人（堤中大夫藤原哲長朝臣）」とあり、光丘文庫本と内容であることが推測される。早稲田大学図書館本（三冊。嘉永二年跋の後刷、刊行年不明。見返し題『役行者御利生図会』。瑞雲堂・文栄堂の共同刊行。坪内逍遙旧蔵）では、第一、八丁が欠損しているため、序文の部分は確認できなかった。

(28) 古活字版。嘉永六年（一八五三年）序。

(29) 早稲田大学図書館本。「大銃篇」（上・下）と「附録」の三冊から成る。附録序文は、哲長の序の他に、梅田雲浜の序文もあり。

(30) 宣嘉が所蔵・書き入れたこれらの文献情報については、高橋智「安田文庫蒐集古鈔本『論語集解』について」（慶應義塾大学学術情報リポジトリ）を参照した。『魏何晏集解』は、室町時代の写本（二冊）。

(31) 岸和田市佐々木勇コレクション短冊目録（江戸時代）の第六四九番目に、「ふく風に」の初句を持つ和歌があることがうかがえる。目録によると、極書…「沢主水正兼備前権介清原宣嘉朝臣」。料紙…薄茶地、銀霞。所蔵者であった佐々木勇は、戦後、地元銀行の設立に奔走し、関西経済界の要職を務める傍ら、文化教育事業にも尽力した人物で、中世から現代に至るあらゆる分野の短冊をコレクションしていた。その数は二万五千以上にのぼり、貴重な書道史、文学史、美術史資料として注目されている。

(32) これについては塚原康子「明治三〇年の宮内省式部職雅楽部」(『東京芸術大学音楽学部紀要』三一 二〇〇六年三月)を参照。

(33) 『香取群書集成 第五卷』(統群書類従完成会 一九八八年) 参照。

(34) 赤松香雨編。西行から本居宣長に至る筆蹟の複製集。鹿児島大学附属図書館蔵。

(35) 土居光華作、河鍋曉斎画。石川松太郎監修『女大学資料集成』第五卷(大空社 二〇〇三年) 参照。

(よしはしさやか 本学日本学研究所研究員)